

### 三年で一千字が読める

幼稚園における漢字教育は、「漢字で教える」漢字教育でなければなりません。家庭における漢字教育は、「漢字を教える」漢字教育でよろしいのです。

幼稚園の漢字教育は、幼稚園におけるすべての教育活動を通して行なうものですから、「漢字で教える」という姿勢が特に有効であり、また大切なのです。

しかし、家庭には、幼稚園のような教育のための施設も時間もなく、また、幼稚園の先生のような指導力を持ったお母さんはまずいないと考えなければなりません。だから、簡単な知識だけで、かつ、容易に出来る指導法でなければなりません。それで、端的に「漢字を教える」漢字教育を目指すのが良い、と言うわけです。

また、教育は長い期間にわたり、継続して実践することが大切です。「石の土にも三年」という諺がありますが、一旦、漢字教育をやってみようと思ったからには、ぜひとも三年間は継続して実践してほしいと思います。そのためにも、簡単な知識だけで容易に出来る指導方法、と考えたわけです。

さて、最も容易に出来る方法は次の通りです。毎食事の前後に、漢字カードを子どもに見せ、これを読んでやることです。見せる時間は十秒もあれば十分です。

初めに与える漢字は、子供の好きな物、喜びそうな内容をもった漢字がよろしい。猫の好きな子供だったら、「この字は坊やの好きな猫という字よ。ねこ、ねこ」と言って教えてやります。

また、苺の好きな子供だったら、「この字はお前の大好きな苺という字よ。いちご、いちご」と言って教えてやります。普通の速さで、少し大きめの声で、口をしっかりと動かし、はっきりとした発音で読んでやります。

一日三回の食事の前後にやりますから、毎回10秒間かかるとして、一日の学習に要する時間はちょうど1分間です。この時、「これは苺という字よ。カードを見て、いちごと読んでごらんなさい」と言って読ませるのは、一層良いことです。

さて、第二日めは、昨日教えてやった漢字カードを見せて、「これは何という字？ 読んでごらん」と言います。すると、必ずと言って良いくらい、その漢字を覚えて正しく読みます。

読めたら、「よく読めたわね。では、今日は新しい字を教えてあげま

しょうね」と言って、次の漢字を第一日と同じ要領で教えてやります。第二日めは、これをやはり朝、昼、夕と六回くり返します。前日の漢字カードを一回めで読めても、必ず六回とも質問して読ませることが必要です。

### 読めないのを責めるのは禁物

では、昨日の漢字カードが読めなかった場合はどうするかと言いますと、初めて教えるような調子で、「この字はね。お前の大好きな苺という字よ。いちご、いちご」と言って教えてやれば良いのです。決して、「昨日、六回も教えてやったのよ」と言って、子供を責めたりすることは禁物です。

こういう子供こそ、実は大器晩成型の頼もしい子供ですが、軌道に乗るまで指導に骨が折れても、あせらずにじっくりと教えることが大切です。あせって子供を責めたら、折角の有望な素質を傷つけ、だめな子どもにしてしまいます。

こうして、毎日「これ、何ていう字？」と質問するカードが一枚ずつふえていき、八日めにはこれが七枚になります。その後も、毎日一枚

ずつ新しいカードが追加されていきますが、一日六回、一週間質問して読ませたカードはそれで質問するのを打切りますから、質問するカードは七枚以上ふえることはありません。

新しいカードが毎日一枚追加されますが、同時に一枚ずつへらしていきますので、毎日七枚のカードを質問して読ませ、新しく一枚の漢字を教える、というわけです。七枚のカードの質問に20秒、新しい漢字カードを教えるのに10秒、合計30秒間が、毎回学習するのに要する時間で、一日の合計がちょうど三分間になります。

一日に六回、それを七日間続けて復習するわけですから、一枚のカードは必ず42回くり返して読まされることになります。これだけ練習しますと、うまくすれば一生のものになります。記憶のある間に、どこかでその漢字を見る機会があって、記憶がさらに強められるからです。

こうして、三年間続けて実践しますと、一千字の漢字が覚えて読めるようになり、中学生向けの本でも読めるようになります。そうなれば必ず読書好きの子供になりますので、漢字力はますます伸びていきます。こうなったらもうしめたものです。